【曲目解説】

組曲「ペレアスとメリザンド」は、ガブリエル・フォーレ（1845～1924）が、ベルギーの作家、モーリス・メーテルリンク（1862～1949）の戯曲「ペレアスとメリザンド」のロンドンにおける初演に際して、間奏曲として作曲したものです。フォーレは後に、「シシリエンヌ」という作品 78 のチェロ独奏曲をオーケストレーションして加え、交響組曲として編曲し、作品 80 としてまとめました。作曲は 1898 年です。戯曲「ペレアスとメリザンド」は、フォーレの音楽だけでなく、ドビュッシーやシベリウスも、この素材に対して作曲を行っています。謎めいた美少女メリザンドを巡る、二人の男ゴローとペレアスの確執、そして悲劇を描いたこの戯曲は、音楽家だけでなく、多くの他の芸術家の創造力を刺激しつづけました。ある女流作家は、メリザンドを「究極の悪女」と呼びました。普通の意味の悪女と異なり、本人は他の人々の幸福を願いながら、自らの意思に関わらず、彼女に想いを寄せる男達を次々に不幸にしていく、本人にその意識がないだけに不幸を防ぐことが難しい。結局、この戯曲でも、嫉妬に駆られたゴローはペレアスを殺害し、自らを原因とするこの惨劇に絶望したメリザンドも自殺してしまいます。本日は、通常の曲順を変え、ペレアスの死とメリザンドの自害を暗示する「モルト・アダージョ」を先に演奏し、「シシリエンヌ」を最後に置き、ペレアスとメリザンドの天上での幸福を祈ってみました。

ブラームス（1833～1897）は、変奏曲の名手と言っていいでしょう。この「ハイドンの主題による変奏曲」は、ブラームスが書いた管弦楽用の独立した唯一の変奏曲ですが、19 世紀の管弦楽の変奏曲の最高傑作に数えられるものです。この変奏曲には、本日演奏する管弦楽用の作品５６ａと 2 台のピアノ用の作品５６ｂがあります。両曲とも細部が少々違うだけで、本質的な構成上の差異はありません。ブラームスは最終的には管弦楽曲にするつもりで、中途で一応 2 台のピアノ曲としてまとめたと考えられています。ともに、まだ第 1 交響曲を書き上げる前の 1873 年夏に、トウッツィンクで作曲されました。この曲の主題は、ハイドンが 18 世紀の終わり頃、エステルハージ公の軍楽隊のために書いたと言われる「野外音楽のためのフェルトパルティーエン」と名付けられた 6 曲の中の、第 6 曲の第 2 楽章から採られました。ハイドンは、この主題に「コラール、聖アントニー」と記しましたが、ブラームスもスコアの主題提示の部分に、その名を記しています。ただ、これがハイドンの自作のものかどうかは、かなり疑わしく、古い巡礼の歌とも当時歌われていたものだとも言われています。ブラームスは、この主題を、ハイドン研究家の友人から 1870 年に見せられ、以来、変奏曲の構想を温めていたのでした。変奏は極めて入念で、全体の設計も巧妙であり、緊張と弛緩の配置も効果的です。第 8 変奏につづく終曲は、それ自体変奏をなす、パッサカリアの形をとっています。この曲は、第 1 交響曲への布石にもなり、また、晩年の第 4 交響曲終楽章パッサカリアにもつながるもので、ブラームス研究の上からも見逃せない作品です。

ベートーフェン（1770～1827）は、1803 年、あの奇跡的な大曲「英雄交響曲」を書き上げましたが、それにつづく年月、大作への傾注の疲れも見せず、新たな音楽の世界を、猛烈な勢いで突き進んで行きます。そんな中に書かれた「第 4 交響曲」は、「英雄」と「運命」の間に挟まり、地味な存在ですが、力のこもった、内容の濃い傑作です。例えば、冒頭緩やかに開始される序奏の旋律に注目して頂きたい。あの有名な「運命」の冒頭主題との密接なつながりに気づかれることでしょう。（テンポは全く異なりますが）　この曲の明るく溌剌とした雰囲気には、テレーゼ・フォン・ブルンスウィックとの恋愛が関わっているようです。本日演奏する３曲には、様々な愛の形が描かれています。この交響曲、終楽章のベートーフェンの情熱、活力を皆様にお届けして、演奏会のフィナーレを飾りたいと思います。